

鵜さばきの舟べりほどに頭を低く

山田真砂年

逆鱗のごとき枯葉の脆さかな

(第三句集『夜は昔の』より)

あとがきで作者は、「俳句は言葉ばかりが先走らず、実感を大事に詠みたい。虚構を描いても、そこに実感が宿り、リアリテイーが滲むような俳句でありたい」と述べているが、至言と思う。

一句目は、「鵜飼五句」と前書きのある五句の内の二番目の句。篝火から火の粉が舞い散る夜の鵜舟を詠んだ最初の句の次に続いている。鮎を捕まえた鵜を舟べりに引き寄せ、鵜匠が吐き出させている光景を詠んだものだろう。「頭を低く」の措辞で鵜と鵜匠との一体感がリアリテイをもつて伝わってくる。

二句目は感覚が前面に出た句。枯葉の脆さは当然のことだが、それを「逆鱗のごとき」と言い切ったところに作者の感性が光る。握りしめた枯葉を潰す時、植物の最後の抗議の言葉として確かにこの言葉は相応しい。

氏は「稲」主宰